平安時代和文語と中世王朝物語用語の一側面(一)

――「――ぶ・む」動詞と「――がる」動詞の場合――

関　一雄

はじめに

稿者は、旧著で平安時代の和文語の一部は鎌倉時代のいわゆる和漢混淆文に伝えられ、平安時代のほぼ同じ意味を表すとされる漢文訓読語とは同一文脈中で異義語として、明確に使い分けられていることを明らかにした。(注1)

このことは、和文語が平安時代の単純な日常的用語なのではなく、文学作品の用語として適さないいわゆる漢文訓読語を避け、文学用語として洗練されたものを簡抜したものであることを、意味するものである。と同時に、漢文訓読語は漢文訓読によって生じたものとは限らず、平安時代の日常的用語が漢文訓読の際には選ばれることのあったことを示唆するものでもある。

しかし、旧著の論証に用いた和漢混淆文は、平安時代の和文の流れを主に汲むものではなく、むしろ漢文訓読文等の後裔に近いものであると見るのが、今なお通説のようである(注2)。一体、和漢混淆文なるものは、作者（表現主体）の主体的な用語選択（言葉遣い）によって成立するものとは考えにくいことから、和漢混淆文なる文体を認めない説(注3)に稿者は従いたいのであるが、「文体」というものをどう規定するかという難問が存するので、ここではこの問題には立ち入らない。ただ、上記の通り、和漢混淆文は漢文訓読文等の流れを主として汲むものである、とする通説には、疑義を差し挟むものである。

平安時代和文、殊に平安朝物語の後裔として、いわゆる擬古物語が擬せられている。今日では、擬古物語なる名称は避けられ、鎌倉時代物語あるいは中世王朝物語などと称されるようになっているが、後者の名称が示唆する如く、その描く内容は平安時代の貴族社会の、男女の恋愛を主なテーマとしている、作者（表現主体）は、平安時代の人間として、平安時代語（即ち、平安時代和文語）を選択して、それぞれの物語を書き上げたものと予測される。

そこで、稿者は今までに調べ得た若干の物語のうちの若干の用語について、平安時代和文語との比較をしてみたい。中世王朝物語の用語が平安時代和文語をどのように受け継ぎ、または受け継いでいないかを明らかにすることにより、まだ十分には解明されていない平安時代和文語の性格の一側面にも近づいてみようというのが、本稿の意図するところである。

なお、本稿で用例採取に選んだ作品は、次の通りで、括弧内は引用に用いたテキストである。引用例にはそのテキストの所在ページを付した。

『海人の刈藻』『木幡の時雨』『苔の衣』『住吉物語』『風につれなき』『雫ににごる』『小夜衣』（以上『中世王朝物語全集』、必要に応じて『鎌倉時代物語集成』の本文を参照した。）・『とりかへばや』（鈴木弘道『とりかへばや物語の研究校注編』）・『山路の露』（山内洋一郎『本文と総索引』）・『松浦宮物語』（萩谷朴『松浦宮物語〈角川文庫〉』・同『松浦宮全注釈』）・『我身にたどる姫君』（徳満澄雄『全註解』、今井源衛・春秋会のものを参照）

の一一の物語。

一、あはれぶ」「あはれむ」と「あはれがる」

「あはれぶ」「あはれむ」は、『山路の露』『松浦宮物語』『小夜衣』に次のように使われている。

1小野には、たゆみなくをこなひにこゝろを入て、年へたるあま君達にもやゝ立ちまさりふかき方の心をくれをもいとあはれびたまへば、（『山路の露』五ペ）

2あまぎみ「（略）御心みだれ給はざなる、いとめでたき御こと也。三世のしよ仏もいかに哀みたまふらん」など、ことゞくしうの給ひなすに、（『山路の露』五ペ）

3げにいみじう心ふかくおぼし入て、おしのごひまぎらはしたまへる御さまは、すこし物おもひしらむ人は、哀み過し給はぬやうもやあらん。（『山路の露』二二ペ）

4（母后）「（略）天帝このことをあはれびたまふによりて、天上に時のまのいとまをたまはりて、（略）」（『松浦宮物語』一〇七ペ）

5（民部少輔）「かかるあはれむ心ならば、さだめて心あはせて出だし聞こえなんず」（『小夜衣』一四四ペ）（注4）

「あはれぶ」「あはれむ」の、歌の例を含めて平安和文に用いられた実態は、旧著にも記したが、次の通りである。（作品の下の数字は、その用例数）

『古今和歌集』仮名序1・『後拾遺和歌集』序1・『金葉和歌集』歌1・『千載和歌集』序1・『大斎院前の御集』歌1・『成尋阿闍梨母集』詞書1・『宇津保物語』会話1・『源氏物語』会話2・『栄花物語』会話2・『俊頼髄脳』会話2

このように、勅撰和歌集の序や、物語の登場人物の会話に用いられ、後者は男性貴族・僧侶のものに偏るところから、平安時代の「あはれぶ」「あはれむ」を漢文訓読語と規定してしまう考え方が強いのであるが、その妥当でないことは旧著で述べたところである。

旧著では挙げなかった例を引用すると、

○ふかきよの月をあはれぶはるしもあれ花ふみすぎてたたばいからむ（『大斎院前の御集』一四六歌〈『新編国歌大観』〉）

の歌の詠者は、大斎院選子内親王に仕える「進の君」と呼ばれる女房である。この「あはれぶ」は、詠者自身（表現主体）の感動する気持ちの表現で「あはれがる」が、他者の言動に現れた動作を言うのとは違っている。但し、「あはれぶ」「あはれむ」が表現主体の動作についてのみの表現にとどまるものでないことは、旧著で引用したので省略するが、例えば、『源氏物語』の明石巻で明石入道が、神

仏の動作について「あはれぶ」を用いている例を見れば、明らかなことである。「あはれぶ」「あはれむ」は、心理動作の表現であり、他者の動作についても言う。これは、現代語で、〈彼ハ、アワレンデイル。〉とも〈彼ハ、アワレガッテイル。〉とも言うのと基本的には同じと考えられる。

平安時代の物語・日記類で「あはれがる」が多用されるのは、登場人物の動きを語り手が外側から説明するのに適切な用語であったからである。

「あはれがる」は、中世王朝物語にも用いられている。

1′（皇帝）「いまだいはけなかりけるほどを、いかでかばかり、はたありけむ」とあはれがらせたまふ。（『松浦宮物語』二四ペ）

2′「（歌略）」と院のあそばしたりき。まことしくあはれがらせ給ひて、尋ねさせ給ひしぞかし」（『木幡の時雨』三一ペ）

一一作品という中世王朝物語の一部の用例に止まるが、ここでは、平安和文とは相違し、「あはれがる」よりも「あはれぶ・む」の方が優勢であると言える。ただし、右の二例の如く地の文・会話で、平安時代和文語としての使われ方が伝えられている。

二、「あやしぶ」「あやしむ」と「あやしがる」

「あやしぶ」「あやしむ」は『松浦宮物語』『我身にたどる姫君』に次のように使われている。

1（母后）「（略）いまこの時にあたりて、恩をむくひ、賞をおこなはぬあとをのこす、人のあやしびうたがふべき所なるは。（略）」

（『松浦宮物語』六七ペ）

2人はいみじう心えぬことにおもへれど、この人ゆゑぞ、かくいささかかたぶきあやしまれ給ふこともいできける。

（『松浦宮物語』二五ペ）

3いとどしきにほひのなつかしさに、袖をひきうごかし、てをとれど、おどろきあやしむ気色もなし。（『松浦宮物語』七五ペ）

4（尼上）「（略）もとよりおろかにたづね知ることも侍らぬには、返す返すあやしみながら日頃に過ぐしはべり」

（『我身にたどる姫君』巻一 六六ペ）

「あやしぶ」「あやしむ」は、前章の「あはれぶ」「あはれむ」ほどには平安和文に用いられてはいない。

『宇津保物語』地の文3・『源氏物語』地の文1会話1・『狭衣物語（日本古典文学大系本）』地の文1・『俊頼髄脳』地の文2

『源氏物語』地の文の例は「あやしぶ」であり、会話の例は「あやしむ」で、横川の僧都のものであるが、旧著で説明したところである。次に、『宇津保物語』の例を一つ挙げておく。

○いとうたておろ〳〵しかりければ、たゞを一すぢをしのびやかにひき給に、にはかにいけの水たゝへて、やり水よりふかさ二寸ばかり水ながれいでぬ。人〳〵あやしみ「を」とおどろきぬ。

（樓のうへの下『本文と索引 本文編』一八九三ペ）

この例などは「あやしがる」を用いた方が、物語用語としては適切なところだが、後続の「「を」とおどろきぬ」が、具体動作の表現であるので、心理動作語「あやしむ」を用いたものであろう。

『宇津保物語』も「あやしがる」は、一四例と多用している。

「あやしがる」は、中世王朝物語では、『とりかへばや』に、二

例見える。

1′まことや、宇治には、若君の御乳母、明くるまで帰りたまはねば、あやしと思ふに、御格子などまゐるほどまで、見えたまはず、人々尋ねあやしがりきこゆるに、（一六六ペ）

2′「（略）いとめでき女を、車に乗せたてまつりておはしましにし、いかなる人にかと、あやしがる」と人のまねびきこゆるに、（一六八ペ）

これなどは、平安和文の物語用語をそのまま伝えたものであろう。中世王朝物語に「あやしむ」は上掲のように、あまり用いられないが、下二段のものが『苔の衣』に見られる。

i細殿の戸口の開きたるよりやをら入り給へど、「いかに」と怪しむる人もなければ、（一四七ペ）

このような語が用いられるに至ったのは、「あやしむ（四段）」が平安時代からの日常的用語であり、そこから中世に派生して下二段にも使われたものと推測する。

三、「うつくしぶ」「うつくしむ」と「うつくしがる」

「うつくしむ」は、『とりかへばや』『松浦宮物語』『我身にたどる姫君』『山路の露』に使われている。

1まづ走り出でたまひて、かく馴れ遊びたまへば、なかなかえ制しきこえたまはねば、たゞ若君とのみ思ひて、もてきようじうつくしみきこえあへるを、さ思はせてのみものしたまふ。（『とりかへばや』七ペ）

2いはけなくおはする太子をつねに御前にてうつくしみたまふ時、かならずさぶらはせて、（『松浦宮物語』二五ペ）

3内（女帝）には、かひがひしく幼くおはしましし時、御櫛笥殿もつねに参り、うつくしみたてまつりたまひしかば、（『我身にたどる姫君』巻六 三八〇ペ）

4はるかなる御歳のほどを、ひとへにうつくしみもてあそびたてまつらせたまへば、（『我身にたどる姫君』巻七 四八三ペ）

5宮もさばかりの御ものづつみなれど、これはただおよずけさせたまふをのみうつくしみきこえさせたまへば、（『我身にたどる姫君』巻七 四八四ペ）

6「（略）」とてたつを、「（略）」と、うつくしみあへり。（『山路の露』一二ペ）

前章のものと相違し、「うつくしぶ」「うつくしがる」は無く「うつくしむ」の用例のみが使われている。このことについて、一一という限られた作品の調査から結論めいたことを述べるのは躊躇されるところであるが、平安時代和文語との関連で考えられることは次の通りである。

稿者は旧稿（注5）で、「うつくしぶ」は『源氏物語』に一例用いられるのみで、「うつくしむ」が八例と比較的多く用いられ「うつくしがる」は一例も見られないことから、「うつくしぶ」は古風な言い方であり、他の作品には用いられる「うつくしがる」と「うつくしむ」は、同義語であると結論づけた。

この〝古風な言い方〟という説明は、甚だ曖昧なものであり、現在の稿者は、「うつくしぶ」と「うつくしむ」の相違は単なる発音（音声）上の揺れが表記に表れたものに過ぎないものと考えを改めてい

る。本稿でも一章・二章に記した「――ぶ」「――む」の間に、そのような相違は認められないからでもある。ただし、前二章のものと相違しているのは、この語については「ぶ」「む」の発音上の揺れは少なく「む」の方に定着していたのではないか。これが、中世王朝物語の用語にも及んでいるのであろう。

次に、『源氏物語』以外に用いられる「うつくしがる」について述べる。

上記の旧稿で、「うつくしむ」と「うつくしがる」を、〝同義語〟としたのも、適切ではなかった。「うつくしむ」と「うつくしがる」は意味用法上で、前者が後者を包摂する関係にあると見るべきであろう。すなわち、前者は心理動作をも具体動作をも表し得るが、後者は具体動作をもっぱら表すのである。

○（道長八）若宮いだきいで奉り給ひて、例のことどもいはせ奉り、うつくしみきこえさせ給ふ。うへに「いと宮いだき奉らむ」と、殿のたまふを、いとねたきことにし給ひて、「ああ」とさいなむを、うつくしがりきこえ給ひて、申し給へば、右大将など興じきこえ給ふ。（『紫式部日記』〈『日本古典文学大系』〉五〇五ぺ）

右の「うつくしむ」は、後続の「うつくしがる」とこの文脈では同義であるが、心理動作をも表し得る「うつくしむ」を、ここでは具体動作語として用いて、近接する文での同一語の繰り返しを避けたものである。

『狭衣物語』は、『源氏物語』と並んで中世王朝物語に強い影響を及ぼしたとされているが、この物語の伝本は多種多様で一概に言うことはできないが、『日本古典全書（古活字本〈静嘉堂本文庫蔵〉）』では「うつくしむ」五例、「うつくしがる」一例と、前者が優勢である。このような用語の使い癖が、上掲の中世王朝物語の用語に反映して「うつくしぶ」「うつくしがる」が表れなかったのではなかろうか。

前二章からの考え方によれば、「――む」動詞が、平安時代からの日常的用語であって「――がる」動詞の方は平安時代の物語用語として好んで用られたものであるが、作品により使い癖にかなりの相違があるのである。

四、「かなしぶ」「かなしむ」と「かなしがる」

「かなしぶ」「かなしむ」は『とりかへばや』『松浦宮物語』『住吉物語』『雫ににごる』『木幡の時雨』『苔の衣』『小夜衣』に使われている。

1（母后）「（略）時にのぞみてわきまふる所なく、おそれかなしびてまどひし道に、つひに契りあやまたず、（略）」

（『松浦宮物語』一〇八ぺ）

2世にすぐれたまへりし御さまを、ひとめも見聞きたてまつりし人は、こひかなしみつゝ、野山に交じりてもとめたてまつり、

（『とりかへばや』一二〇ぺ）

3世の中に、大将の失せたまひぬることを、おほやけわたくし嘆きかなしみて、中納言のことによりてとぞいひのゝしれば、

（『とりかへばや』一二七ぺ）【その他二例】

4中納言、「同じ道に」と悲しみ嘆き給へど、（『住吉物語』五五ぺ）

5姫君、いとけなき御心にも、よろづ言の葉につけても、母宮の御

名残をおぼしつつ悲しみ給ふに、（『住吉物語』五五ぺ）

6かく、にはかに御国譲りなどのあるを、誰も、あへなく、「めでたかりつる御代を」と、あさましき民にいたるまで、もて悲しみ奉ること限りなし。（『雫ににごる』二一五ぺ）

7「（略）」と、世の人惜しみ悲しみ奉るさま、ことわりも過ぎたり。（『雫ににごる』二一九ぺ）

8（母上）「心得給へ。中納言の、世とともに恋ひ悲しみ給ふ人は、中の君なりけり。（略）」（『木幡の時雨』二一八ぺ）

9隙々にはこの世・後の世いみじき言葉を尽くして泣き悲しみ給へど何の験かあらん。（『苔の衣二一二ぺ）

10（小太夫）「（略）いかでかばかり心幼きことは思し寄りけるぞ」と泣き悲しめど、かひなし。（『苔の衣』二四六ぺ）

11・12母上などは、後れ給ふべしとも見え給はず。「おなじ道へ」と、大殿もかなしみ給へども、かぎりある事なれば、（略）若きは先立ち老いたるはとどまる世の憂さにて、かなしみながらもとどまり給ふ心地ども、思ひやるべし。（『小夜衣』一五一ぺ）

前章で「うつくしがる」がなかったのと同じく「かなしがる」の用例が無い。

「かなしぶ」が『松浦宮物語』の母后の会話に用いられているが、平安時代和文語との関連からすれば、『源氏物語』に八例（地の文・会話）と比較的多く用いられるものを伝えていると考えてよかろう。『源氏物語』ではこの他に「かなしむ」が横川僧都の妹尼の会話に一例見られるが「かなしがる」の用例は無い。（注6）

「かなしがる」は、『土左日記』及び和文の範疇には入れがたいが『三宝絵詞』に一例ずつ見られるのに、『源氏物語』に無いのは一見不思議ではあるが、平安時代の和文語というものが、現存の物語・日記類に始めて用いられたものでなく、『三宝絵詞』の総序に題名が挙げられたような今日には伝わらないいわゆる散逸物語にすでに使われおり、それを参考に紀貫之や源為憲が「かなしがる」を用いたのだという憶測もしてみたいのである。

しかし、その「かなしがる」は中世王朝物語では使われていない。「うつくしがる」と同じく『源氏物語』に用いられていない、というのと関連づけてよいであろうか。

ただし、「うつくしがる」「かなしがる」が中世以降の用語としては消滅したとは考えられない。

『時代別国語大辞典室町時代編』にはどちらの語も登録されており、抄物・狂言等の用例が多く引かれている。このなかで、「うつくしがる」について次のような語義記述が見られ注目される。

うつくしがる【美しがる】（動四）①特に人の心をひきつけるものがあるので、ことさら大袈裟に賞美する。（用例は抄物から）

②使役の言い方に用いられ、人に媚びるなどして、ことさらに飾りたててする意を表わす。（用例は抄物から）

私見によれば、具体動作語は、態度（仕草）によって動作主体の意志を明確に示す語を言うのであるから、右の辞書の記述中の〝ことさら大袈裟に〟とあるのに符合するのである。

稿者の言う「物語用語」が抄物の用語にもなっている例と考えたい。

五、「めづらしむ」と「めづらしがる」
――付、「あやぶむ」と「あやふがる」――

「めづらしむ」が『住吉物語』に一例使われている。

1その日の暮れ方、中納言殿へ持ちて参りければ、人々めづらしみ合へる中に、（五八ペ）

平安時代和文語では「めづらしがる」を用いるところで、中世王朝物語においても『とりかへばや』で「めづらしがる」が使われている。

1′内にまゐりたまへれば、内侍のかんの君の御方に、女房などめづらしがりきこえて、日ごろの物語などするついでに、（四〇ペ）

2′（今大将ハ）つれなくもてしづめて、内にまゐりたまひて、陣歩み入りたまふより、めづらしがり見たてまつる。（一七四ペ）

3′春宮にまゐりたまへれば、もの遠き御簾の外にて、宣旨の君ゐざり出でて、いみじくめづらしがりきこえて、（一七五ペ）

この一例で、平安時代や中世に「めづらしむ」が日常的用語として存在したとは言えないが、旧著に、平安時代仮名文学には用例の見られない語（上代資料及び平安時代の訓点資料などに見える語例）として挙げた中の「あたらしむ」「いとほしむ」「いぶかしむ」「うらめしむ」「うれしむ」「くやしむ」「くるしむ」「ほしむ」のような、シク活用形容詞語幹語基に「む」の下接した語形と同じ型のものであることに注目したい。

ちなみに、「あやぶむ」について触れておく。この「――む」動詞は、ク活用形容詞「あやふし」の語幹語基に「む」の結合したものと考えられている（とすると、第三音節は本来清音のはずであるが、観智院本類聚名義抄の訓では濁声点が差されているのに従い、上掲の形で出しておく）。

この例が、『松浦宮物語』に一例使われている。

1（母后）「（略）」とのたまふ時、人人なほあやぶみ思へる所おほし。（五六ペ）

「あやぶむ」は、旧著で歌語として挙げた。そのうちの一例は次のものである。

○としふりてあやふむきそのかけはしをいかにたばしるあられなるらむ（『六条院宣旨集』）

この例について考え直してみる。第一章に挙げた『大斎院前の御集』の「あはれぶ」が詠者自身の感動する気持ちの表現であったのと同じく、これも「あやふし」と思う気持ち（心理）の動きを「あやぶむ（あやふむ）」で表したものである。旧著では管見に入った限りの用例で歌語と判断したのであるが「あやぶむ」は、心理動作語であるがゆえに散文（物語）に表れにくく、歌には表れやすかったもの、と考えた方が一貫した説明ができるわけである。

中世王朝物語の『松浦宮物語』の「あやぶむ」の一例も心理動作語と見て差し支えあるまい。そして「あやぶむ」は平安時代以来の日常的用語でもあって、現代語に及んでいるのである。

おわりに

以上本稿で述べたことを箇条書きにすると、次のようになる。

一、中世王朝物語に使われた「――ぶ・む」動詞は、平安時代の漢文訓読語の後裔とは見られないこと。

二、平安時代の物語用語では具体動作を表す「――がる」動詞が多用されたために「――ぶ・む」動詞は全体的に少数派となったものであって、その少数例は主に心理動作語として用いられたと考えられること。

三、「――む」動詞は平安時代の日常的用語でもあって、中世にもそれとしても行われ、中世王朝物語の用語に採用されたものと考えられること。

注

1『平安時代和文語の研究』〈一九九三年〉第二部第二章『宇治拾遺物語』に伝えられた「和文語」動詞と「訓読語」動詞――中古仮名文学用語の性格に関する遡行的近づきの試み――

2小池・小林・細川・犬飼共編『日本語学キーワード事典』〈一九九七年〉の「和漢混淆文」の項では、『平家物語』の一節を引用した後の解説の一部で、次のように記している。

「和文」と「漢文」との調和の上に成り立つ「和漢混淆文」は、平安朝女流の手になる仮名文学隆盛と、それ以前から存在する男性の手になる「漢文」「変体漢文」「漢文訓読文」の洗練普及とが、平安末期に合流して生み出されたものである。

この記述では、必ずしも「漢文訓読文」等を「和漢混淆文」を生み出す主流のものとしているわけではなく、和文との調和に力点をおいたものであるが「和漢混淆文」の中で用いられる語（語彙）のうちで、漢語や漢文訓読語は、「漢文訓読文」等の流れを汲むものであるとする考え方が前提となっているものと受け取れる。

3山田俊雄「和漢混淆文」（『岩波講座日本語10文体』〈一九七七年〉所収）

なお、注2の『日本語学キーワード事典』の当該項目の末尾に、右の山田論文が「参考文献」として挙げられている。本文に述べた内容を主旨とする論を「代表的なもの」（同事典の凡例）として挙げていることに、稿者は困惑する。「和漢混淆文」を消極的な見地からではあっても、認めている論は存在するのであるから、挙げるとすれば、むしろそういうものを選ぶべきではないのか。

4この用例は、『鎌倉時代物語集成』所収本では当該箇所が「あはれみの」となっており、これでは動詞そのものの例とはし難いが、引用例を存疑のものとするほどの異文ではないと考える。

5関一雄「「うつしむ」と「うつくしがる」をめぐって―中古仮名文学用語の一性格―」（「山口国文」第五号〈一九八二年〉）

6関一雄「「かなしぶ」「かなしむ」「かなしがる」小考―中古仮名文学の用例について―」（「山口国文」第四号〈一九八一年〉）

この拙稿については、阿部健二氏が「かなしぶ・かなしむ」攷―『今昔物語集』を中心に―」（『国語文法史論考』〈一九八六年〉所収）で批判を加えられた。傾聴すべき指摘も少なくないが、『源氏物語』の用例のみについて言えば「かなしぶ」は「漢文訓読語」ではなく、「かなしぶ」と「かなしむ」は〝同一語における語形

のゆれ〟と考えていることは、氏と同じなのである。氏に教示を得たかったのは「かなしがる」をどう考えるかであるが、同著は遺稿論文集であり、今は叶わぬ思いとなった。今更の如く氏の早世を悼み悲しむ。